

# 惑いの年齢

——『グラン・モーヌ』の一つの読み方——

鈴木正昭

- 〈目次〉はじめに
- §1 出発と到着
  - §2 孤立と反目
  - §3 遊びのいろいろ
  - §4 遭遇
  - §5 離脱と脱皮
  - §6 女性の場合

## はじめに

人生には青春時代と呼ばれる時期が存在し、幼年、少年期から成人にいたる中間地帯を形成している。これは大人でもなければ子どもでもない時期で、ある時は大人とみなされ、またある時は子どもとみなされて当人も当惑する年頃である。そればかりではなく、これは人により程度の差異は認められるものの、大きな危機の時期でもある。青春の開始と終了が何歳から何歳までであるかに関しては人により多少の見解の相違は認められるであろうが、だいたいにおいて10代の後半から20代の初めくらいまでというのが共通認識ではないかと思われる。

青春と呼ばれる時期が人々に強く意識されるようになったのがいつからであるのか、といった青春観の歴史の変遷はともかく、近代に近づくにつれこの期間が長くなってきたことは異論の余地がないものと思われる。

周知のごとく歴史の進化が緩やかな時代には学ぶべき規範は過去に存在していたので、後に続く世代はそれを年長者から学び、継承することが同時に成人になることを意味していた。こうした時代には青春というものに人々はあまり重きを置かなかつたのに、近代に入ると青春の占める地位が飛躍的に向上した。

これはすべての人が社会的な規範の大半を社会から与えられる時代が終わり、個人がそれぞれの才覚により人間形成を遂げなければならない時代が到来したことを意味している。それだけ個人の裁量に任される部分が大きくなったわけであり、またそれだけ自らの責任において子どもから大人への脱皮を遂げなければならなくなったことをも意味していることは明らかである。そのため過渡期である青春時代が人々の関心を引き、その意義が飛躍的に向上したものと思われる。

近代になり、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修行時代』、ヘルマン・ヘッセの諸作品、ロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』、トーマ

ス・マン『トニオ・クレーゲル』など青年がさまざまな試練を乗り越えて大人になっていく過程を描いた作品が多く見られるようになったのは決して偶然ではない。青年は遍歴と放浪の結果、それまでの自分の殻を脱ぎ捨てて新たな自己を確立するにいたる。彼らの諸作品が若い人々の必読書だったことを中年以上の人々は記憶しているに違いない。

若い人の読書離れが叫ばれるようになってすでに久しい。それとともにこれらの作品も今日ではほとんど読まれることはなくなった。これはおそらく近代の青春期にある人々が遭遇したとはまた異なった事態が現在青春時代を迎えた人々を見舞っているためであると思われるが、その件に関しての考察は別の機会を待ちたいと思う。

我が国でもつい先頃まで文学作品で扱われるのは青春時代を生きる若い人々であり、その読者も大半は若い人々であったのも記憶に新しい。青春という時機を終えると多くの人々は小説など見向きもしなくなるか、あるいは忙しい仕事の合間を縫って読み捨ての推理小説や時代小説に目を通すぐらいがせいぜいで、もはや人間形成の苦しい道筋を追体験するような小説を読まなくなるのが普通である。もちろん我が国の場合は西欧諸国とは異なり、遅れて近代化をたどらなければならないという特殊な事情もあり、古い風習に反抗して郷里を離れて、大都市、主として近代化の象徴だった東京での人間形成を主題とする作品が主流を占めていた。

我が国では江戸時代には15歳になると武士の子は元服をむかえ、以後は一人前の大人としての処遇を受けるのが一般的だった。30代になってもまだ青春時代を続けているように見える多くの人々が存在する今日の我が国の現状から見ると、15歳で成人というのはあまりにも早すぎるように思われるであろう。

かつての青春が早く終わり、大人になって社会の一翼を担わなければならなかったのは、人生50年という今日とは比較にならないほど短かったかつての（といってもたかだか数十年以前にすぎないのだが）平均寿命にもその理由の半分はあるだろう。また貧しさゆえ、いつまでも子どもを養育する余裕を

持たなかった社会では子どもは早く一人前になるよう陰に陽に促されたためもあったに違いない。あるいはそれと同じことであるが、豊かな少子化社会では早く成人になることを子どもに対して強く求めなくなった。いずれにせよこうした問題は単独の原因によって生じている事態ではないであろうし、ここでその結論を求めることは不可能であるが、青春期の終了時期に遅延が生じていることは確実である。しかしその開始時期に関しては、以前とさほどの相違は認められないといっているのではないだろうか。

## § 1 出発と到着

本稿で扱う『グラン・モーヌ』という作品はサント・アガトというフランスの架空の農村地帯の学校で学ぶ生徒たちの幼年期から青春時代への変化を美しい地方の風物の四季の移ろいの中でとらえた傑作として、フランスでは今日にいたるまで途切れることなく読みつがれてきた。「小説離れ」、「文学離れ」のささやかれる我が国で今日どの程度この作品が読まれているかは資料のないことではあり、推測の域を出ないけれども、残念ながらまずほとんど読まれていないといっているのではないかと思われる。

筆者は数年前に「総合講座」という科目を担当した際に簡単なアンケートを試みたことがある。その際「あなたは今までに外国の小説を読んだことがありますか」という質問に対して3分の2近くの学生が「いいえ」と答えているのを見て非常に驚いた経験がある。もちろん限られた学生に対するたった一度の調査で結論を出すのは軽率のそしりを免れないだろうが、だいたいの傾向を推し量ることはできるのではないだろうか。「読書離れ」は一般に言われている以上に進んでいるようである。もちろん、だからといって必ずしも本が読まれなくなったわけではない。書店に並ぶおびただしい本を見ると、漫画やマニュアル本など実用書は以前に比べて多くなっているように思われる。読書の傾向が変わっただけで読んでいる本の量はあまり変わっていないのではないか、という推測にも十分な根拠はあるかもしれない。ただか

つてのような青春期の必読書というものが消滅してしまったことは確かであるように思われる。

『グラン・モーヌ』は19世紀末のフランスの中央部の農村をその舞台にしている。物語開始時点では本編の主人公の一人で語り手でもあるフランソワ・スーレルは15歳、物語と同名の主人公オーギュスタン・モーヌは「17歳くらい」とフランソワよりも約2歳の年長として設定されている。他の主人公たち、フランツ・ド・ガレもジャスマン・ドゥルーシュもモーヌと同年齢である。

『グラン・モーヌ』を一読すると、全編にわたり多くの出発と到着が繰り返されていることにただちに気づかされる。物語はフランソワが10年前から暮らしている住居を兼ねた学校にモーヌが到着するところから始められる。フランスの地方に行くと、今日でもまだ多少は残っているようであるが、以前は学校はしばしば役所も兼ねていた。そしてサント・アガトの学校もそうした地方行政の末端に連なる施設だった。

モーヌは初等教育、中等教育前期を自らの父親が教員として勤めていた学校で受けた後、中等教育後期にあたる過程を受講すべく、母親に伴われてフランソワの父と母とが教員をしているサント・アガトにやって来たのだった。モーヌの到着の想起とともに、それからさらに10年前にフランソワたちが転勤でこの地に到着した際のさまざまな出来事もそれに重ね合わされて想起される。

サント・アガトへの転校生の到着はフランソワの人生にとっても大きな転機になった。少年はやがて青年へと脱皮していくことになるのであるが、その脱皮を促したのはこの転校生の一連の行動からの刺激によるところが大きかったからである。

「誰かがやって来て、僕から平和な子どものありとあらゆる喜びを奪ってしまった。身をかがめ夕食の支度をする母の穏やかな顔を僕のために照らし

ていたろうそくの火を誰かが吹き消してしまった。夜、ガラスのはまったドアに父が木の雨戸をおろすと、僕たちはランプを囲んだ幸福な家族になったのに、誰かがそのランプを吹き消してしまったのだ。」<sup>(1)</sup>

## § 2 孤立と反目

この小説ではモーヌの到来とともにサント・アガトの年長の生徒たちは一つの時代を終えて、昆虫が脱皮するようにそれまでと異なる自己を形成していくことになる。モーヌはただそこに混乱を持ち込んだ破壊者ではなく、幼年期から青年期への脱皮を促す人物として登場したのだった。彼は道化でもなければトリックスターでもない。その役目を果たすのはモーヌに数ヶ月遅れてサント・アガトに姿を現したフランツ・ド・ガレである。

モーヌの転校から間もなくクリスマスが到来した。スーレル家では例年通り父方の祖父母とともに一家水入らずのクリスマスを過ごすため、彼らを最寄りの駅まで馬車で出迎えに行くのが慣わしだった。スーレル先生(フランソワの父)はフランソワをもう一人の生徒とともに迎えに行かせるつもりだったのであるが、モーヌが彼らを出し抜いて一足先に一人で出かけてしまう。

結局モーヌは途中で道に迷い、4日後にサント・アガトに帰還した。学校に戻った彼がフランソワの目に、「疲れて、腹を空かせているけれども何かに驚いている旅人<sup>(2)</sup>」のように見え、同級生たちには「喜びと好奇心の入り交じった不思議な感情<sup>(3)</sup>」を呼び覚ましたのは、彼らがモーヌの身に生じた何事かを敏感に察知したからである。転校直後から生徒たちの遊びの中心になっていたモーヌは、帰還後はそれまでの仲間たちとの交友を避け、一人の世界に閉じこもるようになった。

この孤立はやがて他の生徒たちとの反目にまで発展する。そればかりかこの反目は学校に対する襲撃事件を引き起こしさえした。この襲撃は途中で放棄され、襲撃者たちは逃走する。もっともこの逃走はしくまれたもので、追

跡したモーヌがかえって捕獲されて「不思議な屋敷」までの地図（未完）を奪われることになった。生徒たちを反目させ、襲撃事件にまで駆りたてたものは彼らにとって不可解なモーヌの変貌だった。モーヌの変貌はかつての仲間にとっては許し難い裏切り行為だった。後にドゥルーシュが言うように、この時モーヌが我が身に起こった出来事を詳細に語ってあげればこうした結果を招くことはなかったに違いない。

「不思議な屋敷」を探索しようという執拗な意志にもかかわらず、モーヌの意図は常に挫折を余儀なくされる。幾度にもわたる出発の企てにもかかわらず、彼は最後の一步を踏み出すことができなかった。フランソワは季節がよくなったら徒歩ではなく、馬車で探索に出立することを提案し、モーヌの承認を取り付けた。

ところが一応の心の安定を得た彼の前に「不思議な屋敷」の住人であるフランツ・ド・ガレが現れる。モーヌが彼の正体に気づかぬのを幸い、フランツは自分もモーヌと同じ「不思議な屋敷」を訪れたことがあるのだが、その道筋を途中までしか思い出せないで、モーヌがどの程度知っているのか確認するためにモーヌの地図を奪ったのだと打ち明けた。そしてモーヌの地図に不足する部分のいくらかを補っておいたことを告げ、さらには「不思議な屋敷」の娘が復活祭などの休暇に訪れるパリの邸宅の住所をモーヌに教えた。

やがて正体を打ち明けたフランツは、翌朝面会を求めて馬車に赴いたモーヌとフランソワを嘲笑うかのように夜の間ですでに姿をくらましていた。そしてモーヌもフランツの出発を追いかけるかのようにそれから間もなくパリへと旅立っていった。

モーヌはイヴォンヌ・ド・ガレを、フランツはヴァランチーヌをそれぞれ追い求めるために出発と到着を繰り返す。もっともそれを繰り返すのは男性主人公たちばかりではない。ヴァランチーヌもまたフランツを求めて、一度は身を落着けたモアネル夫妻の制止を振り切ってパリへと旅立っていく。さらにフランツが教えたパリの住まいの近くでモーヌとヴァランチーヌが遭

遇し、それが新たな愛人関係の原因となり、それがさらなる出発と到着の原因となった。従って一連の出来事を準備したのはフランツだったといわなければならない。

物語はイヴォンヌとの間にできた娘を連れて旅立つモーヌの姿をフランソワが想像する場面で終わる。モーヌのサント・アガトへの到着で始まった物語は彼の「不思議な屋敷」からの出発によって結末を迎えたことになる。

フランソワにとってサント・アガトの学校生活はモーヌ以前とモーヌ以後に分けられるけれども、それはより厳密に言えば「不思議な屋敷」以前と以後というべきであろう。それ以前はフランソワはもちろんのこと、モーヌも他の少年たちと大差のない存在で、同じ遊びを共有していた。とはいえ、彼はすでに他の子どもたちとは異なる世界の存在に一足早く気づき始めていたことも確かである。それは「面白い時には彼も笑ったけれども、控えめだった。それは自分だけが知っている、もっと面白い話のために哄笑をとっておいているみたいだった」というフランソワの印象からも明らかである。

彼らは大方上級クラスに所属する生徒たちで、繰り返しになるけれども物語の開始時点でそれぞれの年齢は15歳から17歳である。例えばフランソワは15歳、モーヌは「17歳くらい」である。3名の主人公と対立し、最終的には和解したジャスマン・ドゥルーシュは「特に気に入らないのは、あのドゥルーシュです。17歳で大人ぶるなんて何を考えているのか」というフランツの批判から17歳であることが判明している。

しかしその反面、主要な登場人物の中でイヴォンヌ、フランツ、ヴァランチヌの3人に関しては年齢が明記されていない。もちろん彼らもほぼ同年齢であることは確実ではあるけれども、明記されているグループとそうでないグループが存在することは興味深い。二つのグループはサント・アガトの生徒とそうでないもののグループというようにも読める。しかしそれ以上に本質的な相違点は、前者が捜し求める側のグループであるのに対し、後者が捜し求められる側に属するという点である。繰り返される出発と到着の多く



は前者が後者を追い求めるために発動される行動である。搜索される側には謎の存在が必要である、と作者が考えたため意図的に年齢を明記しなかったのであろうか。

さらには前者の人々よりも後者の人々の容貌のほうがより具体的に記述されていることも興味深い事実である。この物語の語り手たるフランソワ・スーレルに関しては股関節炎に悩む閉じこもりがちな少年という紹介はなされてはいても、容姿に関する記述は一切存在してはいない。

彼ら主人公の年齢は物語の開始時点で現在の我が国の学校制度に移し替えるとはほぼ高校生のそれに相当する。いずれにせよ、いわゆる思春期と呼ばれる微妙な年齢であり、いろいろと問題を引き起こしがちな時期である。我が国でもこの年齢層の抱える問題はじめ、不登校、無気力をはじめ枚挙にいとまがなく、マスコミの話題の中でも相当大きな比重を占めているといっても過言ではない。いわば主人公たちは肉体と精神の発達のアンバランスによって提起されるさまざまな問題と対決することで問題を解決し、成人の世界への脱皮を行わなければならない年頃なのである。

こうした多くの新たな事態と直面しなければならない年齢は当然ながら個人の発達史における危機の時代であり、その対処いかんでは生命それ自身が危機にさらされることさえ珍しいことではない。つい最近まで自殺といえは若い人がその中心を占めていたことを思い出すだけで十分であろう。バブル崩壊後の長引く不況の中で倒産やリストラによる中高年の自殺者の増加や、高齢化の進行に伴う高齢者の自殺が増えてきたのが最近の傾向であるが、これはまた別の問題である。

青年期への移行はいつの時代といえども困難なものであるが、今日ではそれに社会全体で対処するための儀式がかつての力を失い、青春がいつまでも持続して、終わりのない青春を30代、40代になってもおくらざるを得ないものも多く、かつての時代よりも一層深刻な問題が提起されているといえるであろう。

青春の危機を迎える時期も、それへの対処の方法も人それぞれで、まさし

く個性の相違というべきであろうが、それを最初に感知するのはそれまでの仲間である。それまでとはどこか異なる態度、遊びからの離脱などがその顕著な兆候である。そのことによりいち早く次の段階に達した若者は周囲から奇異の目で眺められたり、反感を買ったりすることがある。フランスの場合は前者であり、モースは前者後者とも該当したとっていいであろう。

### §3 遊びのいろいろ

ところでサント・アガトの生徒たちの青春期以前の遊びはどのようなものであったか。我が国では子どもが外で遊ぶ声を聞かなくなったという指摘がなされてから随分時間が経過した。その原因は、かつて子どもの代表的な遊び場であった広場が消滅し、また広場と並ぶ代表的な遊び場であった路地が激減したこと、自動車の増加に伴って家の周りの道路が遊び場としての機能を喪失したこと、受験勉強の激化に伴う塾通いや、ピアノ、習字などのお稽古事によって遊び時間が減少したことなどがその主たる原因であろうか。

かつては同じ学校に通う近くの子どもがすなわち遊び仲間でもあったという点は今日大きな変貌を遂げている。もちろんそれがまったく消滅したわけではないにしても、かつてと比較した場合の変貌は否定できない。これが地縁の希薄化に伴う現象であることはいうまでもないことであるが、その点ではサント・アガトの子どもたちの遊び仲間の形成も、我が国の例えば昭和30年代くらいまでの子どもたちの遊び仲間の形成とほぼ同様のものであったと考えて差し支えないものと思われる。

かつては我が国でも多くの場合、子どもたちの交友範囲は同じ学校に通う生徒たちとの交際にはほぼ限定され、それ以外の交際は例えば遠くに住む父母方のいとこたちとの間でもたれるものだけであったといっても過言ではない。生活圏が今日とは比較にならないほど小さかったこともその大きな原因である。つい何十年前前までは農村部の住民の生活圏が自分の生まれた町や村をはみ出すことはきわめて稀だった。多くの方は生まれた村で学校に通い、

農繁期には田んぼや畑で生産活動の一翼を担い、卒業後は同じ田や畑での仕事に主要な働き手として従事し、適齢期をむかえると同じ村で生まれた娘を嫁にむかえ、あるいは同じ村の男のもとに嫁ぎ、そこで次の世代を生み、育て、年老いて死をむかえると、同じ村の外れにある墓地に葬られるという生活がむしろ一般的だった。事情はフランスでもそれほど変わらなかった。

この小説は現在からちょうど百年前のフランスの、それも地方を舞台にする小説である。今日と同じくやはり世紀末と呼ばれた時代で、人々は終末感に不安を覚えたりした点でも今日と多くの共通点を持った時代だった。とはいえこの百年の変化はきわめて大きなものだったのも事実で、子どもの遊びに関する詳しい調査報告が存在するか否かは不明であるが、現在のフランスの子どもたちの遊び事情はこの小説の中に見出されるそれと現象的には大きく異なっているものと思われる。

資本主義の進展に伴い、多くの人々は都市生活者となり、給料生活者となってかつての共同体から離脱し、それまで人々を結び付けていた紐帯が切断されて根なし草的な性格を強めていった。必然的に人々の生活は大きな変化を被った。そして大人の生活が大きく変化したのに子どもの生活が変化しないことはありえないことである。

事実我が国の子どもの遊びも信じがたいほどの大きな変化を被っている。もっとも大きな変化は外での遊びが室内での遊びに変わった点である。また複数の子どもの遊びから一人遊びが主流になった点も見逃せない。一人でファミコンで遊ぶか、漫画や劇画を読む子どもの姿というのが今日大人が子どもの遊びという言葉聞いた際に思い浮かべる最大公約数的な姿ではないだろうか。おそらくフランスの子どもたちの多くもこれに近いのではないかと思われる。

ところでサント・アガトの学校にやって来たモーヌは早速屋根裏部屋の倉庫に無断で侵入し、使い残しの花火を見つけ出して、それを校庭で打ち上げようとフランソワを誘う。それ以前の彼は裸足で川っぶちを歩いてバンやマ

ガモの卵を探して母親を喜ばせたり、<sup>な</sup>梁を仕掛けて魚を捕まえたりした。あるいは<sup>わな</sup>罠を仕掛けてキジを捕まえたこともあった。これは服に引っ掻き傷をつけただけでも母の叱責が恐くて家に帰れなくなったフランソワと好対照をなしていた。

モーヌを知る以前のフランソワは足の不自由な子どもとして設定されている関係もあり、どちらかといえばあまり他の子どもたちとは遊ばない子どもとして描かれている。「私は庭に面した窓の近くの古い跳ね板に腰掛けて本を読んでいた」<sup>(6)</sup>とあるように、放課後の彼は孤独な生徒として描かれている。その点では彼の姿から一人遊びをする現代の子どもと多くの共通点を持っているということもいえそうである。しかもフランソワも今日の日本の子どもたちの相当部分がそうであるように一人っ子だった。彼ばかりではない。モーヌもドゥルーシュも同様である。またヴァランチーヌにしてもフランツにしても兄弟がいるとはいえ、それぞれ姉が一人いるだけであり、当時（1世紀前）の我が国のように5人も6人も子どものいる家庭は少なくとも主要人物の中には存在しない。これは小説の構成の便を図るため、不必要な部分を削ぎ落としたためでもあり、当時から人口があまり増加しないまま今日にいたっているフランスの実情をある程度反映しているためでもあろう。

しかしフランソワは同世代の子どもたちとの交際を必ずしも忌避していたわけではない。「今でも片足で惨めにぴよんぴよん跳びながら、家の周りの路地をすばしこい生徒たちの後を追いかけている自分の姿が目<sup>(7)</sup>に浮かぶ」。肉体的な制約によりフランソワの家の外での遊びはきわめて制限されたものにならざるを得なかったのは確かである。しかし彼の外遊びの制限は肉体的な条件による制約であるよりはむしろ母親の子どもに寄せる思いによるところが大きかった。母親は息子が片足で跳びながら村の子どもたちと遊ぶ姿を見かけると横面を張って遊びから引き離して家に連れ戻すのだった。その理由は「ミリー（母親の愛称）は私のことをとても誇りに<sup>(8)</sup>していた」からである。自慢の息子がよその子どもたちに引けを取る姿を正視することが耐え難かったのである。

モーヌの訪れがこうした事態に終止符を打つことになった。もちろんこれはモーヌの行動の報告者としての彼の物語での役割からすれば当然のことであり、ミリーもまたあれほどフランソワの外での遊びを好まなかったにもかかわらず、モーヌと一緒にいればフランソワの外出を禁止しなかった。

モーヌがやって来るまでのフランソワの遊びはもっぱら母と過ごすか、読書がその大部分を占めていたといっても過言ではない。その点では外遊びがその大きな部分を占めていたモーヌとは大きな違いがある。もっとも障害を持たないほかの生徒たちにしても、日頃は放課後暗くなるまで校庭に残ってかけっこなどいくつかの遊びをして暗くなると家に帰るか、モーヌが来てからは放課後村のあちらこちらを歩きまわり、村の人々の仕事を訪ねて仕事ぶりを見てまわる程度で、それほど多彩なものではなかった。しかしかつてはこれが普通で、日常が単純である分だけ、祭りなどの非日常が人々に待たれる度合いは今日とは比較にならないほど大きなものだった。

## § 4 遭 遇

学校から逃亡したモーヌは途中で道に迷い、好人物の老夫婦が二人だけで住む他の家から隔離した一軒家にたどり着いた。そこで一休みし、馬車を農家に連れてくるため、一人でもと来た道を馬車を止めた場所まで戻る。ところが驚いたことに馬車は忽然と消え失せ、そこには馬を冷氣から防ぐために背中にかけた毛布だけが残されていた。馬車の追跡を断念したモーヌは再び老夫婦の待つ農家に戻ろうとするのだが、どうしてもたどり着くことができなかった。その結果、以前は家畜小屋として利用されていたと思しき小屋で一夜を過ごすことになった。我が身の不運をかこちながらも、彼は気分を変えるべく、ずっと幼いころに見て以来誰にも話したことの無い夢、ないしは幻影を思い出した。

「ある朝、彼は半ズボンやパルトー（短いコート）のぶら下がった自分の部

屋で目覚めないで、木の葉に似た色の壁紙を張った緑色の細長い部屋にいた。そこにはとても柔らかな光が流れていて食べることができそうな感じだった。一番近くの窓の傍らには一人の娘がいて、背中を向け、彼の目覚めを待っているかのように編み物をしていた……彼にはベッドから抜け出してこの魔法の部屋の中を歩く力がなかった。彼は再び眠りに落ちてしまった……「だれどこの次は起きるぞと固く誓った。明日の朝こそ！」

この夢が彼のその後を予告しているものであることは物語を読み進めるうちに明らかになる。幼いモーヌは無意識のうちに女性への憧れを抱きながらも、未だ時機尚早のため目覚めることも、その女性に近づくこともできない。女性がモーヌのほうを向かず背中を向けているのはそのためである。しかしモーヌはいよいよ寢床から抜け出して、その女性への接近を決意する。

「不思議な屋敷」にたどり着いて「奇妙な祝典」に参加した彼は、あちらこちらと広い屋敷内を夢見心地で歩きまわるうちに疲労を覚え、とある部屋に紛れ込む。そこで彼は「この世でもっとも静謐な幸福」にひたる。この部屋では一人の娘がピアノを弾き、傍らでは何人かの幼子たちが静かにピアノに耳を傾けたり、絵本に読みふけていた。子どもの中にはモーヌの腕にぶら下がったり、彼の膝の中に入り込むものもあった。ここでもこの情景が彼のかつて見た夢の現実化されたものであるとされている。昨夜小屋で見た夢の女性と同じく、このピアノを弾く女性もモーヌにその顔を見せることはなかった。しかし今度は夢の中の女性ではなく、現実の生身の女性である点が昨夜の夢の中の女性との相違点である。彼女は顔を見せることも、声を聞かせることもなく、ただピアノの音を聞かせてくれただけだった。しかるべき時が来るまで彼女は顔を見せないのである。しかし生身であることにより、いよいよその時が間近であることが暗示されている。

翌朝になり彼は初めて娘の顔を見ることになった。最初は母親とともに通り過ぎる顔を一瞥した。次には同じ船に乗りあわせたため、さらに長時間彼女の顔を見る機会が与えられた。二言三言ではあったが言葉を交わすことも

できた。サント・アガトに戻った彼は何度も彼女の顔を思い出そうとするのだが、彼女の被っていた帽子、彼女の前かがみの姿勢、彼女の澄んだ視線、ほっそりしたウエスト、彼女の青い目といった個々の要素を思い出すことはできても、彼女を総体的に思い出すことは不可能だった。

しかし彼女に関する記述自体はそれほど多くの情報を提供してくれるわけではない。彼女がかなり長身であること、金髪であること、やや寸の詰まった顔立ちであること、しかし個々の道具立ては非常に整っていること、などなどである。これを例えばすべてをあますことなく描写しつくそうとするバルザックなどの容貌の描写と比べればその相違は一目瞭然であろう。写真を見るように正確な絵を提供するというよりは、彼女の印象が読者に定着することを意図した記述である。

モーヌはひとたび後にした「不思議な屋敷」に住むイヴォンヌ・ド・ガレーとの再会を果たすべく、かつての友人たちの群れを離脱しその捜索に全力を傾注することになるのであるが、ただ一度の出会いがその後の行動をすべて規定してしまういわゆる一目惚れの度合いはフランツのそれを彷彿させるものがある。

フランツの場合はある日のこと公園で見かけたヴァランチーナに一目惚れして、ただちに結婚を決意し、それをただちに実行に移してしまうという（もちろんヴァランチーナの逃亡によりひとたびは挫折するのであるが）異常な行動にでた。事実表面上の大きな相違にもかかわらず、ヴァランチーナはモーヌに対し、あなたは自分のかつての恋人（フランツ）によく似ていると語るのであるし、ヴァランチーナの正体を知ったモーヌは「彼は僕の第一の親友なんだ。僕の冒険の兄弟なんだ。それなのに彼の婚約者を奪ってしまうなんて！」とヴァランチーナを責めることになる。表面上の相違にもかかわらず、モーヌとフランツは意外に多くの部分を共有していることがわかる。モーヌから意志を差し引けばフランツに、あるいはフランツに意志を追加すればモーヌになるといってもいいほどである。

フランツについては最後までその幼児性が繰り返して強調される。「15歳、

彼はまだ依然として15歳だったのだ。それは僕たちが3人であの恐るべき子どもじみた誓いを結んだサント・アガトの教室の掃除をした夕方の年齢なのだ」というフランソワの指摘がその代表的な例である。もっともこれはフランソワのそれであり、必ずしもモーヌのそれでないことはいうまでもない。

いずれにしても失敗に終わったフランツの結婚式からサント・アガトに戻るべく「不思議な屋敷」に別れを告げようとするモーヌの目にその屋敷は前日とはまったく異なった様相を呈することになった。もちろん不調に終わった慶事に対する驚愕、同情などもこうした印象を生み出す要因ではあったけれど、モーヌの場合にはこの屋敷で見かけたイヴォンヌによるモーヌ自身の変身がこの視線の変化を生み出したものである。「彼は今朝がた自らの姿を映してみた養魚池の側を通った。すでにすべてのものがなんと変わって見えたことか」。

## § 5 離脱と脱皮

サント・アガトに姿を現わしたフランツとガナッシュはモーヌにその正体を見破られることなく、生徒たちを籠絡しフランソワやモーヌの生活の場所でもある学校に襲撃を仕掛けた。これは襲撃それ自体よりは「不思議な屋敷」の噂を聞きつけたフランツがモーヌがそれまでにどの程度のことまで調べたのかを確認するためだったことは先に見た通りである。

フランツはサント・アガトの子どもたちに多くの遊びをもたらした。まずさまざまな珍奇な品物により、彼は村の子どもたちの好奇心を大いに刺激した。しかも見つければ叱られることが予測される中での行為であるから、生徒たちにはスリルを味わうという楽しみが付加価値として付け加えられたことはいうまでもない。

ついで彼がもたらした遊びは我が国の騎馬戦を思わせる遊びである。あるいは騎馬戦自体が明治時代に西洋から我が国にもたらされた遊びなのであろうか。彼（フランツ）がもたらした新しい楽しみの中で「もっとも血なまぐ



さい<sup>04</sup>』というフランソワの言葉からも当時必ずしもポピュラーな遊びではなかったことが予想される。

最後に、フランツがともに旅をしていた仲間たちと一緒に子どもばかりではなく、大人をも対象にしたサーカスという遊びがある。このサーカスこそは作品の前半と後半を分かつ重要なターニング・ポイントである。ここで読者が、ということは主人公たちが目撃することになる出しものは学者山羊による数当て、ポニーによるさまざまな芸、とりわけ人物評価、最後はガナッシュによるパントマイムでこれは二部に分かれている。

正体を明かした後、姿をくらますフランツ、彼の残した「不思議な屋敷」の娘が年に何回か休日を過ごすために滞在するというパリの屋敷の住所を探索するためのモーヌのパリへの旅立ちなど、このサーカスは以後物語が急展開を遂げるための仕掛けである。その後フランツはヴァランチヌを捜し求めながら各地を転々とすることになり、モーヌはフランツに教えられたパリの屋敷でフランツの消息を求めてそこに姿を現したヴァランチヌと互いの正体を知らぬまま愛人関係を結び、それがまたモーヌの新婚家庭からの逃走の遠因にもなるからである。

結局最後にはフランツはドゥルーシュを中心とする生徒たちからはじき出されてモーヌやフランソワの側に立つことになった。これは「不思議な屋敷」によって表される子どもの世界から見た異界体験の有無による子どもたちの再分類である。モーヌは当然であるが、フランツもまた一人の女性を深く愛し、たとえ挫折に終わったとはいえ、結婚を企てたわけであるから、子どもの世界からは足を踏み出しかけていた、ということが許されるであろう。ただし彼の場合には、ひとたび覗いた大人の世界から転落して再び子どもの世界に戻ってしまった点でモーヌとは異なっている。しかしそれは全面的に子どもの世界に戻ってしまったことを意味してはいない。

フランソワの場合にはあくまでもモーヌの忠実な同伴者であり、必ずしもこの時点ではモーヌやフランツのように未知の世界に一步を踏み出していたわけではない。彼はあくまでもモーヌの忠実な同伴者に過ぎない。彼はモー

ヌを通して、モーヌの肩越しに新しい世界を垣間見ているのである。しかしながらモーヌとなる人物に当初はフランソワという名前が与えられていた事実から、作者はフランソワもモーヌと同じ精神を共有する人物とみなしていた、と考えて差し支えないものと思われる。

こうしてみると当然ながら大人の世界への登場の仕方は三者三様であり、それこそがまさに彼らの個性なのである。フランツやガナッシュの逃亡を確認した後で、モーヌは補習授業をさぼってフランツが記入した「不思議な屋敷」にいたる道の探索におもむく。フランソワもスーレル先生やムーシェブフラとともに授業を逃げ出した生徒たちの捜索に出発する。フランソワは途中で他の二人と別行動をとり、自らその屋敷への道を発見しようとするのであるが、その「小さな円形の光」を出口にもつ「長く、薄暗い道」<sup>(15)</sup>を発見することはできない。これはフランソワの次の段階への移行は時機尚早であることを示している。したがってモーヌがパリに去るとただちに彼はモーヌを裏切り、村の子どもたちの中に溶け込んでしまう。フランツ同様彼もモーヌ以前の世界に一時的に引きずり戻されてしまうのである。

とはいえフランソワにとってモーヌの不在により、一時的に幼児退行があったとはいえ、同時にそれは彼のうちに「少年期が永久に去った」<sup>(16)</sup>という強い感慨を生み出したことも確かである。こうした感慨を抱くこと事体彼がすでに少年期を抜け出しつつあることを証拠立てている。彼のその後の唯一の関心事が師範学校の試験の合格を目指した受験勉強になることからからも明らかであるが、彼は大人の世界への旅立ちをモーヌやフランツとは異なった形で達成することになる。

モーヌが去った後、モーヌの不思議な経験がフランソワを含めた生徒たちの話題になった時、「彼はその事を僕らに話し、僕らにその地図を見せるべきだったんだよ」<sup>(17)</sup>とある生徒は主張する。しかし秘密の世界を持つことこそ子どもから青春期への移行の大きな指標の一つである。この点他の生徒たちはまだより多く子どもの世界に所属していたといわなければならない。そして打ち明け話をした際にも、モーヌは肝心のフランソワにさえすべてを明か

したわけではなかった。また「不思議な屋敷」の所在を突き止めたフランソワがフロランタンおじさんの肝いりで開催される（かつての祝典の再現ともいうべき）「野遊び」の会に誘った際のモーヌの煮え切らない態度も、彼が抱えていてどうしても人に言うことのできない秘密のためだったことが、作品を最後まで読み進むと明らかにされる。

フランソワがすべてを知るのはイヴォンヌの死後のことであり、いわばすべてが終わってしまった後だった。これは読者の興味を最後まで引きつけるための小説の技法でもあるのだが、その技法が説得力を持つのはそれが世の中ではしばしば物事はこのような経過をたどるものだという共通の理解が存在する場合に限られる。

この物語の発端もモーヌが密かに抱いた計画から始まった。秘密はこの物語の隠れた主役である。もしモーヌがスーレル先生に無断で馬車を借りてフランソワの祖父母をむかえに行く計画を打ち明けていればモーヌは「不思議な屋敷」にたどり着き、そこでイヴォンヌに会うこともなかったであろう。もしパリに出た自分がそれと知らずにフランスの恋人であるヴァランチヌと愛人関係に陥ったことを打ち明けていれば、と考えてみると秘密が物語を次に進めるいわば推進力であることが分かるであろう。

この物語では最後に置かれたモーヌの日記で多くの秘密が解明されるのであるが、これに似た構成を持つ作品としては例えば夏目漱石の『こころ』などが容易に思い起こされる。『こころ』では「先生」の秘密が打ち明けられるのは日記によってではなく、やはり巻末の長大な書簡によるのであるが日記と書簡はたいした相違ではない。「先生」に惹かれていた「私」はその人の言動に謎の部分がきわめて多いことに気づく。しかしそれは「先生」の存命中は明らかにされなかった。長いこと連れ添っている夫人にもそれは謎である。「先生」が秘密を打ち明ける決意をしたのは、明治天皇の死に触発されて自決を決意した後のことだった。いわば死と引き換えに秘密が開示されたのである。

「水遊び」もまたサント・アガトの生徒たちにとって夏には欠かすことの

できない遊びである。しかし試験が終わって生徒たちが開放感に浸っている時期だけに、例えば彼らの前方を歩くジルベルト・ポ克蘭という娘をめぐるかなりきわどい話が出ることもある。「僕はあの娘にキスするのは初めてじゃないんだ」という者もあれば、後ろからからかいの言葉をかけたりする者もある。しかし彼らはまだ彼女から50メートル以内に接近することはできない。

この50メートルこそ彼らの多くと青春という大人の世界の入り口とを隔てる距離である。青春期にいたるには少しばかりの飛躍が必要なことをこのことは意味している。その不足を補うためには背伸びが必要である。そこで彼らは一人前の大人のような口をきいてスーレル先生を当惑させる。「不思議な屋敷」の所在地がこうした大人びた会話から析出されてきたことは偶然ではない。

「不思議な屋敷」の発見者がジャスマン・ドゥルーシュであるのは偶然ではない。彼は育った環境のためなのか、元来そうした資質に恵まれていたのか、いずれにせよ大人の世界の理解への最短距離にいたことは確実である。「ブージャルドンほど鈍くなかった彼はモーヌが僕たちの生活にもたらしたそれまでとは異なったすべてのものを感じ取ったのだと思う」というフランソワの感想もまたフランソワ自身が同様に考えていたからである。この時点ではフランソワもまたドゥルーシュと同等の地点まで到達していたことになる。もっともドゥルーシュにはただ単に新しい世界への飛躍とは言い難い卑俗なものがあり、それがモーヌやフランソワのみならず、とりわけフランツに反感を抱かせる主たる原因だった。

モーヌがパリへと去った日にフランソワはドゥルーシュに誘われて彼の家に赴き、何人かの仲間を加えてリキュールを飲み、お菓子を食べた。お酒を飲むことやたばこをふかしてみることが大人の世界を垣間見るための儀式であることは今も昔も同じである。したがってこれは公認の集まりではなく、ドゥルーシュは母親に無断で店の商品に手をつけていたのだった。この秘密のパーティーは予測を裏切る母親の早い帰宅によりあえなく崩壊してしま

う。「人間としゃべっているものと信じていたのに、突然それがサルだったことに気づいてしまった遭難者のように失望した」というフランソワの感想は同じ罪を犯すことによる仲間意識の共有に対するフランソワの違和感を示している。

フランソワの場合もモーヌの到来と、モーヌが「不思議な屋敷」から持ち帰ったものにより飛躍への準備は進行中だった。彼の成長は幼年期の持病だった股関節炎からの治癒の度合いとして提示されている。「オーギュスタン・モーヌの到来は僕の回復と一致していて、新しい生活の始まりだった<sup>(21)</sup>」。もちろんこの時点では治癒は全面的なものではなく、それにはまだしばらくの時が必要だった。

彼の病が完全に癒えたのはドゥルーシュにより「不思議な屋敷」への道が発見され、その重大な知らせをモーヌに知らせるのが自分の役割であることを自覚した時点である。「僕の膝がまったく痛まなくなったのはその日の夕方からだったと思う<sup>(22)</sup>」。モーヌの家に赴くフランソワの覚える高揚した気分はそのスピード感や坂道を急速に降りていく際に覚える酩酊感などによるものであるのは当然として、大人の世界への飛翔や秘密の共有による気持ちの高ぶりによるものでもあるだろう。

「もし普通の若者にとって自転車がとても面白い道具であるなら、最近まで4キロを過ぎると汗まみれになって惨めに足を引きずっていた僕みたいなかわいそうな男の子にとってそれが面白いものでないわけがないではないか……坂の上から下っていき、風景の窪みに突っ込んでいくこと、羽ばたきしたように接近すると道の前方が左右にかき分けられ視界が開けることを発見すること、一つの村をあっという間に通りすぎ、それを一瞥で持ち去ること<sup>(23)</sup>」がそれを知らなかった若者にとって面白くないはずはない。

こうした一種の「めまい」症状をもたらす遊びは例えばロジェ・カイヨワが挙げている競争、偶然、模擬、めまいという遊びの分類の中でも最も生命を危険におとし入れる可能性のある遊びである。これは危険を伴うだけに最も面白い遊びでもあるが、それが青春への飛躍への階梯の隠喩として利用さ

れているのである。

青年としての自分が誕生するのは象徴的にいえば少年期までの自分が死ぬことによってである。安定した社会ではこうした死と再生の儀式は元服など社会的に承認された制度により保証されていたのが、社会の大きな変化とそれに伴う世界像の動揺により、社会がそれを与えることが不可能になり、その結果としてより個人的にその儀式を執り行わざるを得なくなったのが現代の社会である。例えば成人式などの形骸化が囁かれるのはそうした事情があるからである。

## § 6 女性の場合

彼ら男性主人公たちはそれぞれの流儀で青春への脱皮を図るのであるが、彼らにとって女王のような存在であったイヴォンヌはどのような経過をたどったのであろうか。彼女は登場当初からどことなく童話のお姫様の雰囲気をもたえている。森の中の城館に住んでいて、王子様の訪れを待機し、自ら行動することはない。彼女はある時は母親のごとく彼ら男性主人公の話聞いてやり、大人の女性であるかのごとくに振舞いながらも、必ずしも大人とは言いきれない幼さも残している。彼女はある時は聖母マリアを思わせることもあり、またある時はきわめてたよりなげな女性として描き出される。もちろんこれは過渡期にあるすべての主人公の属性でもある。

モーヌとの間にできた子どもを出産した彼女はお産が原因で死ぬ。これは彼女において女性としての肉体の要素がきわめて乏しいものであることの何よりの証左である。彼女は聖少女として永遠に大人になってはいけない存在なのである。永遠の少女は子どもを産んだ時点でその資格を喪失し退位しなければならない。彼女の産んだ子どもが男の子ではなく、女の子であったのはその子が彼女の身代わりだったからである。

ヴァランチーヌの場合はドウルーシュにやや似て、その環境のため少年期から青年期へと早急に追いやられたと考えられる。彼女は昔の子どもたちが

そうであったように、幼年期が終わるとただちに労働力として大人とともに働き、一人前の大人とみなされる環境で生まれ、成長した。夢を育む余裕がどこを見まわしても皆無だったために、フランツの話が信じられずに逃亡しなければならなかった。彼女は青春期の夢を経由しないで大人への道を歩まなければならなかったわけである。彼女は「かわいらしいピエロ<sup>(2)</sup>」として登場し、フランツやモーヌの愛の観念性を暴くことになる。

モーヌ、イヴォヌヌ、フランツがいずれも豊かな境遇で育ったのに対し（ド・ガレ家の没落はここでは問わないことにする。没落するには豊かでなければならない）、ドゥルーシュ、ヴァランチーヌはそれぞれ差は存在するにせよ、決して豊かとはいえない環境で育っている。ドゥルーシュの場合は物質的にはともかく、環境的には決して望ましい環境ではなかった。したがって夢を育む余裕が少なく、より早い時期から現実との接触を余儀なくされた結果、大人の世界への脱皮は比較的早期に、しかも意識しないうちに達成されることになった。おそらくかつては多くの若者がこうして比較的無自覚に次の段階への移行を果たしていたものと思われる。

育った環境に相違は認められるものの、フランツとヴァランチーヌには大きな共通性がある。それは彼ら二人がピエロと深い関係を有している点である。ヴァランチーヌに関しては「罪を犯したピエロ」といった直接的な表現が見出される。一方フランツ自身はピエロではないけれども、自殺を図った彼を救い、以後行動をともにすることになるいわばフランツの影とでもいいガナッシュは正真正銘のピエロである。「不思議な屋敷」では彼は子どもたちの人気を集め、サント・アガトにおける「大興行」では自らの境遇に関する不満をドゥルーシュめがけてお粥をつめた人形を投げつけることにより晴らそうとした。

彼ら二人はこの作品では問題を紛糾させる一種の道化役を演じているといってもいい。道化はふつう王とペアで登場し、王の影の部分演じて王の身代わりとなったり、王の意識できない真実を暴露して真実の存在を知らしめる役割を演じるもののことである。

一つの世界から新たな世界への旅立ちはいつの時代でも困難をきわめる。とりわけ今日のように価値観が揺らぎ、従来のものにとって代わる新たな規範が存在しない時代にはそれはとりわけ難しいことであるに違いない。それと比較すれば本稿で扱った作品の主人公たちが青春時代に足を踏み入れたのは今日から見れば外見上はまことにのどかな19世紀末のフランスの農村地帯である。電信や鉄道は存在してもまだ限られた範囲でしか使用されず、ひとたび幹線をそれれば馬車が未だ交通の主役を果たしていた時代のお話である。それにもかかわらず当時といえどもやはり少年期から青年期への移行は意外と多くの困難を伴ったものであることがわかる。

主人公たちはこの後どのような人生を歩むことになるであろうか。フランスワやドゥルーシュの場合には手堅い社会人として波乱のない人生を歩みつづけることが予想される。モーヌは世俗的な意味で大人になることなく「冒険家」としてその生涯を終えるのであろうか。そしてイヴォンヌとの間に生まれた娘は？ またフランツとヴァランチーヌは「フランツの家」で平凡な結婚生活を送ることになるのだろうか。物語は何も答えてはくれない。

## 註

原作の引用はNizet社刊のAlain-Fournier著“LE GRAND MEAULNES”（1983）による。

- (1) Alain-Fournier, LE GRAND MEAULNES, p.11.
- (2) Ibid., p.27.
- (3) Ibid., p.27.
- (4) Ibid., p.12.
- (5) Ibid., p.107.
- (6) Ibid., p.11.
- (7) Ibid., p.10.
- (8) Ibid., p.10.
- (9) Ibid., p.48.
- (10) Ibid., p.65.
- (11) Ibid., p.237.
- (12) Ibid., p.196.



- (13) Ibid., p.78.
- (14) Ibid., p.100.
- (15) Ibid., p.127.
- (16) Ibid., p.133.
- (17) Ibid., p.136.
- (18) Ibid., p.149.
- (19) Ibid., p.148.
- (20) Ibid., p.137.
- (21) Ibid., p.10.
- (22) Ibid., p.153.
- (23) Ibid., p.162.
- (24) Ibid., p.60.